

〈座談会〉日外協職員が語る「海外駐在先でのコロナ禍」

危機が人と組織を強くする

海外駐在中にコロナ禍に遭遇した3人の日外協職員に、当時の様子を語ってもらった。それぞれの赴任地で感染はどう広がっていったのか、どのような対策が行われたのか。体験を通して得たものは。

司会

海外安全センター長

佐藤真樹

専務理事

坂部 隆

国際人事センター長

坂本冬海

海外健康・医療センター長

江上隆司



原因不明の肺炎が発生

佐藤 日本では、2020年の1月15日に初の感染者が確認されました。2月に入ると大きなイベントや学校行事の中止が相次ぎ、3月には東京五輪・パラリンピックの1年延期が決定。4月には緊急事態宣言が発令されました。



当時、すでに私は日外協で働いていましたが、皆さんは海外でコロナ禍に遭遇しています。

坂部 2020年の春節の始まりは1月24日でした。ロックダウンは武漢だけだったので、駐在先の上海を発ち日本へ。ところが、一時帰国している間に感染は中国全土に広がりました。31日までだった春節は1週間延長になり、私が上海に戻った2月9日(日)には、すでに街はゴーストタウンのようでした。現地社員にはパソコンを持ち帰り自宅待機してもらい、従業員の安全対策と事業継続、情報収集を指示。北京や広州、工場のある江蘇省の拠点などへはオンラインで伝えました。行政からの方針が出ていなかったこともあり、自宅待機させる以外ありませんでした。



2014～21年
中国・上海駐在

坂本 私がいたタイでは、最初の感染者が北海道旅行から帰国したタイ人夫婦だったことから、日本は危ないという風評が立ちました。社内でも日本人に警戒の目が向けられるようになり、一時帰国していた駐在員がタイに戻ってくる時など、タイ人社員からは「帰ってこさせるな」「一緒に仕事をしたくない」と。普段は穏やかなタイ人が、初めの頃はヒステリックなほど神経質になっていました。



2014～21年
タイ・バンコク駐在

江上 ヨルダンで最初の感染者が判明したのは3月2日、イタリアへの出稼ぎから帰国したヨルダン人でした。政府防衛令が発令され、17日には国境が全面封鎖、行動が厳しく制限されました。



2017～22年
ヨルダン・アンマン駐在

実は2月に隣国のイスラエルが国境封鎖すると聞き、過去の駐在経験からこれは大変なことになると直感しました。すぐにプロジェクトのためドバイから来ていた出張者の出国準備を行い、封鎖される前日(3月16日)に国外退去。現地人スタッフには、ライフラインである水やガス、食料品を家族のため最低1カ月分は買いだめするよう指示していました。